



タイトル 破綻する中国、繁栄する日本

著者 長谷川慶太郎（はせがわ けいたろう）

出版社 実業之日本社

発売日 2014年2月10日

ページ数 231 ページ

日本人はお人好しです。尖閣諸島などで中国に随分酷い仕打を受けましたが、まだ中国と仲良くやっていこうという日本人が少なくない。しかし、そういう人達は、どんどん減ってきている。今現在日本の人口の約9割が反中国である。

ソ連崩壊以前に読んだ、著書の『さよならアジア』では、韓国を除くアジア諸国との決別を唱えていた。

そこでは、「時効」という考え方と無縁な国は、すべて近代社会をもたない国である。中国がその好例だ。さらに、「政治の自由」、「言論の自由」、そのものが存在しない中国では、政府に対する反発を表現するにも、国外に日本という仮想敵を作り、敵愾心を煽って人々をまとめる方法しかない。1986年時点でのこの発言には、今更のように驚く。

さて、目次を見てみよう。

序章 迷走する中国

- ・北朝鮮の衝撃
- ・防空識別圏設定の誤算
- ・シャドーバンキングが中国崩壊のトリガー

第1章 日本に屈服するか中国

- ・窮地に追い込まれた中国
- ・激しさを増す人民解放軍との攻防
- ・人民解放軍の急所、「シャドーバンキング」
- ・リーマン・ショック後の経済対策 4兆元の功罪
- ・不良債権処理に苦しむ銀行
- ・決定したシャドーバンキングの処理
- ・中国経済の行方

第2章 揺らぐ中国国内

- ・冬が山場に
- ・テロが頻繁化する
- ・怪しげな不動産ブーム
- ・工場シャッター街と中国製品
- ・世界の工場でなくなった中国
- ・共産党が恐れる弱腰外交批判
- ・人民解放軍に困る習近平

第3章 国際常識を逸脱した国家

- ・中国が勝利するのか
- ・レアアースで躓いた共産党に焦り
- ・国際条約を守らない中韓
- ・苦境に陥る韓国経済

第4章 シェール革命で勢力地図が塗り替わる

- ・運のいい安倍首相
- ・技術に対するトップの認識と理解が焦点

第5章 繁栄する日本

- ・消費増税で景気は腰折れず
- ・日本の独自技術が世界で注目
- ・メタンハイドレードの実用化に本腰

第6章 21世紀中に共産主義と民族主義は消滅する

- ・共産主義は人を幸せにしない
- ・情報化社会に負ける共産主義
- ・民族主義は消滅の運命
- ・イランに見る日本技術の素晴らしさ
- ・歴史が証明する日本人の素晴らしさ

面白いと思ったところを幾つか紹介しよう。

2013年9月に中国大手企業10社のトップや、地方政府の幹部も相次いで来日し、日本からの投資促進、日本企業の更なる中国進出と、既に中国に進出している日本企業の撤退取り直しをお願いするなど、まさに中国は頭を下げに来た。

さらに、中国側の要請で訪中した経団連などの財界人に対して、中国政府関係者は日本の「公害防止技術」、さらに「資本」を出資してもらいたいと強く要望した。

いま中国は日本のカネと技術力が欲しいのです。それ程中国は追い詰められているわけです。この時、菅官房長官は、中国企業の代表者に2012年の反日暴動に触れ、その時に受けた日本企業の損害について、中国側に不満を述べたという。「1年前に中国で起きた反日暴動で日本企業へ大損害を与えたではないか。そういうところに日本の企業が出ていくと思うか」と言われて、中国の大手企業のトップたちは頭が上がらなかったという。さらに菅官房長官は「日本で反中国デモが1回でもあったか。神戸や横浜の中華街に反中国デモが起きて店が襲われたか。そういう事実があるならいってみろ。何で、中国では勝手なことをやってもう一度、日本企業に中国に出てきて欲しいというのか。どうして、そんなことが言えるのか」とかなりきつい口調で訪日した中国企業トップにいったそうだ。

そして、今年中国で反日デモはなかった。これは中国政府の指導で極めて厳しい管理が実施されたことによると著者は述べている（官制デモだから当然そうなる）。

これをきっかけに日中関係は雪解けに向かうのではないかという期待が出てきたのだが、その期待を見事に打ち砕いたのが、訪中した財界人が日本へ帰国した直後に発表された中国の「防空識別圏の設定」だった。中国は、右手でやっていることと、左手でやっていることと、真逆なことを平気でしかも同時に行うというところがある。

なぜ、関係改善に向かおうとしている日中関係に水を掛けたかというと、

1. 日本からの資金援助や公害防止技術の提供を受けることで、習近平は経済面において中国が日本に屈することを恐れたからだという。さらに、人民解放軍に活躍の場を提供したいという事情もあるという。日本との尖閣諸島における領有権争いに中国海軍や中国海警局が活躍しているので空軍にも軍功を与えることを狙ったということのようだ。さらに、人民解放軍の内部では「尖閣諸島は中国の領土だ」と中国政府が主張しているのに、未だに尖閣諸島に上陸していないのはおかしいという批判がくすぶっていた。こうした批判をかわすためにも、領有権の設定に繋がったという。

日本のマスコミは中国の空母「遼寧」（排水量6万7千トン、ロシアのスホイ33を真似た中国の戦闘機40機搭載）が東シナ海に配備されれば日本の脅威になると大騒ぎしていたが、本書では“笑い話の「遼寧」”とある。

こんなふうにならされている。笑い話ですが、中国の防空識別圏設定の直後に「遼寧」という中国海軍の空母が訓練の為に山東省青島市の基地から出航。青島から台湾海峡を抜けて、海南島に寄港した。その空母は35機の艦載機を積んでいた。ところが、使える戦闘機は、5機しかない。何故かという、遼寧にはパイロットが5人しかいないという。自由自在に空母に発艦・着艦できるパイロットは相当な技量が必要だという。

米国の原子力空母「ニミッツ」には艦載機が80機、パイロットは200人いる。艦載機の3倍近いパイロットは、3交代制で艦載機を運用しているからだという。それに対して中国

は 5 人しかいない。お粗末なものだ。この 5 人の氏名も日本の防衛相は知っていると考えられると著者はいう。

そして、「遼寧」は尖閣諸島周辺海域を通るルートを回避して、台湾西側の台湾海峡を通過して南シナ海に入る航路を選択したようだ。

つまり、米国海軍と衝突するのが怖かったからだという。この時期、台湾海峡とは反対側の尖閣諸島の東北で、米国第 7 艦隊と、日本の海上自衛隊が合同演習をしていた。海上自衛隊は 15 隻、第 7 艦隊は 8 隻、その中には原子力空母「ジョージ・ワシントン」が防空識別圏の中で、訓練をしていた。すなわち、「遼寧」は日米両軍との衝突を恐れたというわけである。

また、この「遼寧」はガスタービンで動く。これが、「遼寧」の弱点である。この空母は出航すると、大体 2 か月半経つとドック入りし、点検修理しなければならない。というのも、ガスタービンは高熱・高圧のため部品が痛むわけである。部品をどんどん消耗するため、それを交換しないとすぐ、動かなくなる。一方、米国の原子力空母は非常に丈夫に出来ており、大体 3 年間はドックに入らなくても行動できる。

エンジンがガスタービンか原子力なのかで、作戦行動範囲、能力は桁違いなのである。原子力空母はどこにも寄港せずに地球を 1 周することが可能である。

いずれにしても、中国側の兵站や装備などの現実的な側面を見れば、実は弱い立場にあり、それを声の大きさに補っているというのが、現在の中国政府の姿勢のようだ。



「遼寧」は、中国が旧ソビエト連邦で設計された航空母艦ヴァリヤグの未完成の艦体を購入し、航空母艦として完成させたものである。船体だけはレジャー施設への改造のために売却される予定であったため、それ以外の艦内の余分な機器は全て撤去されるはずであったが、造船所関係者によると、主機そのものは撤去されず、電気系統やパイプなどを切断して使用不能にしただけであったという。

その後、ウクライナは本艦をスクラップとして 2,000 万ドル（約 20 億円）で売却する意向を示し、マカオの「中国系民間会社」である創律集団旅遊娛樂会社が 1998 に購入した。「中国本国で海上カジノとして使用する予定」とされていたが、この会社の社長である徐増平は中国軍の退役軍人だった。ボスボラス海峡、ダーダネルス海峡を動力装置の無い大型艦が曳航されて通過するのは危険であること、既に見かけが航空母艦であり、空母の海峡通過を禁じたモントルー条約に抵触することから、トルコ政府は海峡通過に難色を示したが、中国側がトルコへの観光客増加を約束するという政治的折衝で妥協し、2001 年、ようやく中国本国に回航された。2002 年 3 月 3 日には大連港に入港し、西区 4 号埠頭に係留された。

この時期、中国はヴァリヤグのほか、キエフ級航空母艦の「キエフ」と「ミンスク」も購入しており、空母建造の参考にするとされていた。後者 2 隻は天津と深圳で博物館船として一般公開されたが、「ヴァリヤグ」だけは係留されたままだった。・・・ Wikipedia

中国が崩壊して在留邦人 12 万 8 千人が危険な目に合えば、日本人は目が覚めるだろう。

日本企業は従業員の生命や財産を守るという安全保障面で判断する観点がこれまで皆無だった。

中国は経済破綻をキッカケに 7 つの軍区に分裂して戦争になると著者はいう。分裂すれば、必ず、日本に分裂した国の代表が来日して、「軍事や資金面で援助して欲しい」と言ってくる。理由は、「今まで随分、中国に世話になったではないか。日本に救いを求めてきているのに、日本は見捨てて見殺しにするのか。許せない」と言ってくるだろう。

その時に、この申し入れに対し、絶対に断らないと日本は大変なことになる。安倍首相は撥ね付けるだろうが、当然、日本の人権保護団体や経済界からも「救済すべきである」という圧力が掛かるだろう。7 つに分かれたどこかの国を援助すれば、支援する国の戦争相手のその他の国は日本に黙ってはいないだろう。必ず日本に対しても戦争を仕掛けてくる。援助するところした危険があるわけだ。先の第 2 次世界大戦で、日本が負けたのは、中国問題に日本が首を突っ込んだからだ。したがって、中国が潰れるのを日米は黙って見ていればいいのである。

このような状態になれば、日本は対岸の火事として、静かに見守るしかない。中国崩壊は間もなく現実のものになると著者はいう。安倍首相はまず、同盟国の米国の意向を尊重し、米国と手をしっかり結んでうまく対処することが出来れば、その後も日本は繁栄するはずである。

共産主義は、間違いを認める仕組みがないため中国はこれを捨て、いまは寡頭支配の利権を守るための「一党独裁」と「排外的ナショナリズム」のみである。国家の一体性を支える明確なイデオロギーの崩壊は、「中華ナショナリズム」や「反日」では糊塗出来ない。こうなると、国家は分裂に向かうのみである。

本書も内容は「さよなら中国」だが、今では歴史を直視すると彼らは悶死するので直視できず、反日妄想に現実逃避している韓国も加わって「さよなら中韓」になっている。

日本と中韓の間柄は、聖徳太子が煩わしい関係を絶ち、1885 年に福沢諭吉が「東亜の悪友を絶つべし」と脱亜論に書いている。日本にとって脱亜入欧路線はまさに正しい選択で、この構図は 7 世紀以来現在でも全く変わっていない。

著者の本を久しぶりに読んでみたが、まず、情報の取扱量の多さにまず舌を巻いた。しかも、それらを自分の世界観に注入し、新たな予測に組み込んでいく情報処理・加工能力には凄いものがある。

著者は、多くの予測を行っているがそれが当たらないこともしばしばである。しかし、それを補って余りある情報加工能力には脱帽である。著者の魅力はこの辺にある。

初めて著者の本を手にする読者は、目を大きく開かれる思いがするはずである。筆者は今回も、本書から多くを学んだ。お薦めの書である。

2014. 4. 19